

学生とシニアの対話 in 八戸工業大学 2021 報告（全体）

シニアネットワーク東北（SNW 東北）

世話役 阿部 勝憲

報告書取り纏め 本田 一明



八戸工業大学キャンパス

八戸工大との対話会は昨年度に対面で行う計画であったがコロナ禍で中止となった。今年度は大学における原子力研修プログラムの一環として、原子力白書の勉強とそれを基に原子力の課題について話すという狙いから、対面で講演会と組み合わせた対話会が企画された。シニアも白書に目を通して補足の資料を持ち込んでの対話会となった。当日は共通一次試験の前日であったことから、会場は学外の八戸市の屋内スケート場Y Sアリーナの会議室で行った。

学生諸君は原子力研修に参加して原子力関係の企業への就職に関心があるか、あるいは地元企業への就職でも地域の原子力事業に関心を持っていた。今回の企画で政府が国策として進めていることを直に聞け、対話会ではメディアと異なる原子力の特徴と役割を具体的にシニアと話し合えたのは貴重な機会になったようである。世話役の佐藤先生は対話会の前と後では学生の顔つきが変わっていたと評価してくれた。アンケートにも、自分なりの疑問点を解決できた、ローカルなニュースを例にとり分かりやすかった、などの記述がみられた。

本報告の構成（目次）

1. 対話会の概要	p2
2. 対話の詳細	p3
3. 講評	p8
4. 閉会挨拶	p9
5. 参加シニアの感想	p9
6. 学生アンケートの集計結果	p14
7. 別添資料リスト	p15

1. 対話会の概要

(1) 基調講演の後、次の4つのテーマのグループに分けて、学生とシニアとの意見交換を行った。

・対話グループとテーマ

グループ1：「エネルギー問題」

グループ2：「原子力発電」

グループ3：「燃料サイクル」

グループ4：「地域振興」

・基調講演では、内閣府原子力政策担当室 實國慎一参事官から「令和2年度原子力白書について」と題し、講演が為された。

・グループ対話のファシリテータはシニアが受け持って、会話がスムーズに進めるように行った。

(2) 日時

2022年 1月14日（金）12.50～16.30

(3) 場所

八戸市・YSアリーナ 大会議室、小会議室

(4) 参加者

・八戸工業大学 工学部機械工学科 佐藤学教授

社会連携学術推進室 齊藤克治係長、沼田聡穂子室員

・学生 : 21名

・シニア: 8名

大野崇、大塔容弘、西郷正雄、三谷信次（以上原子力学会

シニアネットワーク連絡会)、阿部勝憲、高橋實、
水原洋一、本田一明 (以上 SNW 東北)

・オブザーバ: 1名 瀧上浩幸 (電機工業会)

(5) スケジュール

- 12:50~13:00 開会の挨拶 (佐藤教授)
13:00~14:00 基調講演 (質疑含む)
「令和2年度原子力白書について」内閣府原子力政策担当室 實國慎一参事官
14:10~14:20 参加シニアの紹介
14:20~15:40 学生とシニアとのグループディスカッション
(4グループ構成)
15:50~16:10 ディスカッションの紹介
「エネルギー問題」、「原子力発電」、「燃料サイクル」、「地域振興」
16:10~16:30 講評 (大塔)、閉会の挨拶 (大野)、
参加者アンケート記入

(6) 基調講演

講演者名: 實國慎一氏 (内閣府 原子力政策担当室 参事官)

講演題目: 「令和2年度原子力白書について」

講演概要: 原子力委員会の役割と委員紹介、原子力白書の趣旨紹介に始まり、令和2年度版 (特集) の内容である東京電力福島第一事故から10年を迎えて、白書の第1章~第8章についての内容説明があり、これに続いて白書をどう活用するについての紹介が為された。

学生諸君にとり、白書の内容から原子力の幅広い課題とカーボンニュートラルとの関わりを知るとともに、国のエネルギー政策における原子力の位置づけや政府の取り組みを聞く機会となった。

2. 対話の詳細

(1) グループ1 (報告者: 阿部勝憲)

1) 参加者

- ・学生: 5名 (機械科4年-1名、機械科3年-4名)
- ・シニア: 大野崇、阿部勝憲
- ・オブザーバ: 瀧上浩幸

2) 主な対話内容

テーマ: エネルギー問題 (エネルギー自給率と備蓄、再生可能エネルギーと原子力の特徴と役割分担)

講演資料とシニアの補足資料を手元に、シニアが司会役で始めた。自己紹介では出身や志望など話してもらい、県内の八戸と十和田で3名、秋田県2名であった。

① 初めに研修体験や講演で感じた原子力についての思いを話してもらった。

- ・SDGからも原子力は適しており再処理で再利用できると知った。メディアは危険というが実際に見ると違うように思う。
- ・事故でマイナスイメージ持っていたが、講演で10年たって復興も進んでいること聞いた。メディアで余り取り上げないので自分で調べないといけなと感じた。
- ・六ヶ所出身で原子力志望。仏は原子力7割だが日本でなぜ無理なのか。核のゴミは処分方法あるがCO2はできない。
- ・講演で福島現状を知れた。地元でソーラーが増えているが環境は大丈夫か。火力と原子力も必要。
- ・原子力は燃料が少なくていい。高レベル廃棄物処分が進まないなら一時保管でもいいのでは。

以上のように見聞きしたことから具体的に原子力や地域のことに問題意識をもっていた。

続いてグループテーマのキーワードに関して資料の図など参考に対話を進めた。

② エネルギー自給率と備蓄について

- ・太陽光の発電に関してkW単位で報道していることが多いが、電力としては発電量のkWh単位に意味がある。
- ・太陽光パネルは7割以上が中国製で、これから増やそうとしている風力機器も外国製がほとんどになる可能性。原子力発電所の機器は国内メーカー製。
- ・原子力が準国産と言われる理由を考えた。ウランを輸入しても濃縮や燃料製造は国内企業、少量の燃料から莫大なエネルギーを取り出せて備蓄にも向いている。再処理で取り出したプルトニウムは純国産燃料。

③ 再生可能エネルギーと原子力の特徴と役割分担

- ・資料の一日の出力変動カーブより、太陽光の限界と火力発電対応やベースロード電源としての原子力の役割を理解。
- ・周りの農地にソーラーが増えて心配、日本には適地が少ないのでは。
- ・家庭などでは太陽光も役立つが産業界には無理。集中した安定

電源の原子力が必要。

- ・カーボンニュートラルに関してリスク管理の考え方も参考に。地球温暖化が有るのか無いのか、対策を行うのか行わないのか、の四択で最悪の組み合わせを避けること。

以上のように、学生諸君は研修や白書で学んだことから身近な問題としてエネルギー問題や原子力の役割を考えていた。グループ報告でも、再エネは不安定で原子力が必要、多くの人に知ってもらいたい、メディアは大げさに表現するので自分で調べて判断することが大事、などポイントを指摘した。時間の制約があったが学生諸君が熱心に対応してくれ実りある対話会になったと思う。

(2) グループ2 (報告者：西郷 正雄)

1) 参加者

- ・学生：電気3年 2名、機械4年 1名、機械3年 2名-----計5名
- ・シニア 水原洋一 (ファシリテータ)、西郷正雄

2) グループ2のテーマ

「原子力発電について」

3) 主な対話内容

- ・ファシリテータの水原様より、対話会終了後に行う発表者とサポートの記録係を決めるように学生に伝え、すぐに担当者を決めた。
- ・つづいて、サブテーマ「各種電源コストの比較、原子力発電所の安全対策」に関するシニアが準備した資料を基に、シニアより学生に次の内容について説明を行った。
 - ① 発電コストの比較
 - ② 電気料金のコスト比較
 - ③ 各電源の S+3E 評価
 - ④ 原子力発電所の安全対策---深層防護の考え方による安全対策
 - ⑤ 原子力発電所の安全対策---福島事故前と事故後の深層防護への取り組み
- ・説明後に、学生より、各自一つづつ質問を受け、シニアが、それらに応えた。
- ・以下に主な内容を示す。

- ①発電コストの比較において、太陽光発電については、現在安くなっているが、それは、中国から輸入した単体のパネルであり、品質の良い電気を安定的に供給するには、バックアップが必須であり、その統合システムでは、18~19 円/kWh となり、原子力の 14~15 円 (14.4 円) /kWh よりも劣ることを説明
 - ②「原子力発電所の新設には、場所があるのか」との質問については、新たな場所を見つけるのは、自治体との協議もあり難しいであろう。しかし、既に持っている電力の敷地内に新設の原子力発電所を造ることができる。
 - ③開発炉についての質問では、SMR と HTR (高温ガス炉) についての説明を行った。
 - ④再稼働がなぜ進んでいないのかとの質問には、規制委員会の合格が得られているが自治体の了解が取れていない原子力発電所や、活断層に抵触していないかとの規制委員会の協議に時間がかかっていることが、大きな要因として挙げられると説明した。
 - ⑤安全対策は万全なのかとの質問については、絶対安全とはリスクがゼロと言うことが出来ないのと言えないが、福島第一原発事故相当の地震、津波の自然災害に対しては、安全は万全であると言うことができる。さらに、新規制基準では、竜巻、火山噴火、自然火災、飛行機衝突のテロ対策などを新たに配慮した規制を設け、地震・津波については、規制基準をより厳しいレベルに引き上げて対処している。即ち、事故後は、安全対策については大幅に厳しい基準にしており、それに合格しなければ、再稼働も新設もできない。
- ・学生たちは、上記の質問とそれに対するシニアの回答において、物おじせずに気軽に会話を交えることができた。

(3) グループ3 (報告者：高橋實)

1) 参加者

- ・学生 工学部 機械工学科 3年 4名
- ・シニア 大塔容弘 (ファシリテーター)、高橋實

2) グループ3のテーマ

「燃料サイクル」

3) 主な対話内容

最初に大塔氏が準備した資料を 15 分ほど説明、その後 10 分程時間を取って、学生諸君に、實国氏の基調講演および大塔氏の説明を考えながら、ファシリテーション用紙に、各自の質問、意見等を書いてもらい、自己紹介を兼ねて、それぞれに発表してもらった。一人 2, 3 項目、重複するものもあったが、数多くの質問、意見が寄せられた。

主な質問、意見をまとめると以下の通り。

- ・原子力の燃料に資源としての限度はないのか。
- ・原子力事故は影響が大きく危険だ。安全対策は。事故がないなら有効利用するのは良い。安全なら、そのことを世界中に広められないのか。
- ・濃縮には、遠心分離の他に方法がないのか。将来技術は。
- ・原子力の重要性は理解するが、再処理容量は十分か。再処理を原燃以外でやる予定はあるか。
- ・Pu 利用計画、MOX 燃料のコスト。
- ・発電コスト。
- ・再生可能エネルギーをどの程度増やせるか。
- ・放射線を発生しない化学的手法による発電方法はないか。
- ・省エネは、大変有効だと思うが、具体的にどんなことがどの程度できるか。

シニア側として、手持ちの資料等でできる限り答えたつもりだが、広範囲の質問に、時間的にも、また手持ち資料の限界もあり、十分には答えていない部分もあったと思う。学生諸君の熱気が感じられ、我々も精一杯応答したことは分かってもらえたと思う。その気になれば、ネット検索すれば、いろいろな資料がすぐ見ることができるので、今日の対話をきっかけに、是非各自見聞を広め、自分で考えて欲しい旨、学生諸君に要望し対話を終えた。

(3) グループ 4 (報告者:三谷 信次)

1) 参加者

- ・学生 7 名 : 電気電子工学科 4 年 3 名、機械工学科 3 年 2 名、4 年 2

名)

- ・シニア 本田一明、三谷信次

2) テーマ :

「地域振興」(電源三法制度、立地地域への支援制度)

3) 主な対話内容

- ・今回の対話会が大学側から依頼された内閣府原子力政策室の参事官による「令和2年度版原子力白書」についてと題する基調講演のあとを受けて、グループ4では「地域振興」のサブテーマが与えられていたため、青森県の地域振興と捉えて対話に臨んだ。
- ・説明資料の内容は
 - (a) 本田シニアによる青森県における地域開発の歴史について、特に戦後における地域開発からむつ小川原開発計画・核燃料サイクル他について説明があった。その後(b) 三谷シニアより原子力白書の青森県版ともいえる「豊かで活力ある地域づくりをめざして」(原子燃料サイクル施設等の立地に伴う地域振興)から要旨を抜粋して簡単な説明を行った。
 - ・始めるに当たって先ず学生による進行役を決め、参加者の自己紹介を行った後、具体的な対話を開始した。ほとんどが地元青森県の学生であることが分かった。
 - ・資料説明の中から、青森県全体は将来に向けて他県同様人口減少地域であり、生産年齢人口の減少傾向にあるが、県内は豊かな電源立地交付金に恵まれ、特に核燃料サイクル施設関連促進事業で県内多くの中小企業が参画しており、技術系の若者の将来にとって極めて恵まれた環境にあることを理解してもらった。
 - ・質問に入り、むつの中間貯蔵施設が最近もめているわけは何か？
 - ・原子力の問題で住民(特に高齢者)への説明が上手くいく方法はないのか？
 - ・青森県の地域振興の歴史を聞いたが、失敗の積み重ねの上に現在があるということか？

等について質疑応答を行った。

3. 講評(大塔 容弘)

基調講演をベースに各班がテーマごとに話し合った結果をまとめみると、福島第1原発事故後10年経過しても、あの時の記憶が強く国民の頭に残り、またメディアの過剰反応もあり、原子力発電の再稼働があるも

の、リプレースや新增設が進まないのが現状である。ベースロードとしての原子力発電の特性である環境性、備蓄性そして経済性は良く理解できるので、この状況を打破するための方策は何か。本日の対話会を機会に、これから社会人となる学生の皆さんに、自分の問題として考えて頂きたい。

4. 閉会挨拶（大野 崇）

- ・昨年度はコロナの影響でできなかったが、八戸工大との対話会は、2005年に対話会を開始してから16回目を迎える。佐藤先生、齋藤先生のお陰と感謝申し上げたい。
- ・八戸工大の卒業生は、再処理関係の企業に多くが就職し日本の原子力を支えていただき頼もしい限りです。
- ・今年度の対話会も3年生13名と就職の内定している4年生5名の参加を得て、エネルギー、原子力発電、燃料サイクル、地域振興と幅広い対話ができ、皆も対話を通し新たな知識と我々の熱意を感じ取っていただけたと思います。
- ・3年生とは、来年度再びまみえる機会があり楽しみにしております。若者の特権は物おじせず知らないことを聞いて自分の糧にできることです。どうか、この対話会を活用してください。本日はどうも有難うございました。

5. 参加シニアの感想

（大野 崇）

八戸工大はずっと対面対話を行ってきており、昨年度に続きコロナの影響で対面開催が危ぶまれたが、オミクロン株がギリギリ感染拡大を待っていてくれ、場所を校外に借り準備を整えてくれた学校にも迷惑をかけないで済みほっとした。

今回は、「学生が原子力の話をする機会を設けるといふねらい」とする学校側の意向に基づき、内閣府原子力政策担当室参事官による令和2年度原子力白書の話を受け、4班に分かれ、「エネルギー問題」、「原子力発電」、「燃料サイクル」、「地域振興」について深掘対話を行った。

第1Gにて、シニアの阿部氏、瀧上氏と機械工学科の4年生1名と3年生3名と「エネルギー問題」について対話を実施した。学生の意見は、①持続可能エネルギーはコストが高く電気代が上がる。原子力は必要。②東電福島第一の事故で原子力は危ないと思っていたが調べてみてエネルギーとして原子力は重要というのが分かった。③日本のエネルギー自給率は6%しかない。原子力が1割もないのは問題。核のゴミの再処理問題が課

題である。④太陽光や風力は効率が悪い。大容量の原子力の方が良い、⑤原子力はCO₂排出が少なく環境にやさしい。であったが何故そう思うのかについて逆質問をしながら彼らの知識を深めた。

最後に、佐藤先生が学生の顔つきが変わったといってくれ、今回の対話が役だったことはありがたいと思った。

(大塔 容弘)

学生とシニアの対話に入る前に、大塔シニアからグループテーマである原子燃料サイクルについて、電気エネルギー→原子力発電→原燃サイクル→ウラン濃縮→再処理の順で、その技術的特性について簡単に解説を行った。そして、高橋シニアのアイデアで、学生さんにしばらく時間を設けるのでファシリテーション用紙に各人の質問や意見を書いて欲しいとお願いし、対話を開始した。グループ報告にあるように有益な対話ができたとする。結果的にこの方式が良かった。ワンクッション置いて、前を振り返り頭の整理を行うことの重要性を再認識した次第である。

(西郷 正雄)

学生たちは、既にインターンシップに参加した者や、六ヶ所研修に参加した者たちなので、原子力の勉強をある程度しており、対話はスムーズに進められることができたと思う。

彼らは、青森県の地元の者なので、原子力関係が主な就職先になり得るので、取り組む姿勢は、極めて真剣なように受け止められた。

とくに、原子力発電の未来として、これからも期待できる分野なのかを探っているようにも思えた。

今回の対話会では、1時間20分の中で、各自の自己紹介、サブテーマの簡単な内容の説明をしなければならぬために、会話のための時間が短く、学生からの質問も一人1質問となり、十分な意見交換には短く残念であった。できれば、後1時間長くしてもらえれば有難い。あるいは、対話会の2週間前にシニアに対して質問をしてもらい、シニアの回答を受けて更なる質問を当日してもらうのが良いかと思う。

(三谷信次)

コロナの流行が再び激しくなりそうな状況下でオンライン対話に変更にならないか心配していたが、何とかその前に上手く対面対話の実現し良か

ったと思います。

大学から招かれた内閣府原子力政策室参事官の原子力白書に関する基調講演は、平易で分りやすく核燃料サイクル施設等の原子力施設を多く持つ青森県に将来就職すると思われる八戸工大の学生にとっては、実に有益な内容であったと思います。

グループ4の「地域振興」のサブテーマは、それらをさらに掘り下げた議論を展開でき、SNW東北の本田シニアの「青森県の開発の歴史」についての説明は、青森県在住の多くの学生達にとっても自分達の立ち位置を理解する上で役に立ったものと思われます。

全体の時間が限られていたため、対話の時間が十分に取れなかったきらいはあるが、「地域振興」についての対話という点では、当初の目的は十分達せられたものと思います。

対面対話を実現して頂いた佐藤先生をはじめ、現地の関係者の皆さまに厚く感謝しお礼申し上げます。

(阿部 勝憲)

コロナ禍で心配したが大学側が対策を十分に取り 2年ぶりに対面で行えた。会場はスケートの盛んな氷都八戸の屋内リンクYSアリーナの会議室で、この近くで育ったので地域の発展を感じた。佐藤先生は挨拶で、大学側の狙いは原子力プログラムの参加者が原子力白書に触れ原子力について話す機会をつくることであった。学生諸君はスーツ姿で集中して取り組んでくれた。

講演で原子力委員会担当の講師の方から、原子力の全体像と青森県に関係の深い事業への国としての取り組みを直に聞いたのは、学生諸君から風評対策の質問もあり参加者にとり貴重な機会と感じた。

対話では、自己紹介とともにくつろいだ雰囲気になりこれまで原子力について学んだことや進路のことを真剣に話してくれた。エネルギー問題に関して原子力の特徴を多面的にとらえて、その役割をあらためて認識したように感じた。地域の事業所の見学から就職先として、あるいは周囲で増えるソーラーへの懸念から、メディアの報道と違うことに気づいたようであった。同席の大野さんや瀧上さんのお話は自分にも勉強になった。

マスク越しであったが対面ならではの手ごたえを感じた有意義な会であった。最後に、対話会の準備、実施を担当された佐藤学先生とスタッフの方々に感謝します。来年も実りある対話会が実施できますように願っております。

(高橋 實)

まれに見る寒い日だったが、対話は予想以上に熱気を帯び、学生諸君が今後のエネルギー問題に関心を持つ端緒になったと感じる。實国氏の講演は、令和2年度原子力白書をまとめたものだが、6次エネルギー計画の内容を取り込み、それなりにまとまっていたが、原子力委員会の地盤沈下についてはさすがに触れずらなかったか。

第3グループの対話は、多くの質問、意見が出され、シニア側も、時間の制約、資料の制約等で十分答えきれない程であった。参加学生諸君の資質にも寄ると思うが、ファシリテーション用紙を配り、10分ほど時間をかけ、学生それぞれの質問・意見を書いてもらい、発表してもらったことが大きかったと思う。対話に苦勞している各位には、今後試してみる価値があろう。

(水原 洋一)

- ・ Gr 2は学生さん5名（機械3名、電気2名：4年1名、3年4名：青森県内出身4名、岩手同1名）で、原子力関係企業でのインターシップや研修を受けており、また福島事故の映画（フクシマ50）を見るなど原子力の知識をある程度持っていると思われた。
- ・ 自己紹介の後に、Gr 2対話のテーマ（原子力発電（電源コスト、発電所の安全対策））についてシニアの用意した資料に沿って概要説明を行い、その後質疑を行ったが対話時間が少なく1質問/人となり残念だった。
- ・ 主な質問は、発電コスト削減の方法？（安全関係はコスト削減対象外、競争入札等を実施）、今後の新設地点はあるのか？（新規地点の開発は難しく現在所有のサイトが中心となるだろう）、小型炉、高温ガス炉や核融合炉の開発状況？（それぞれ研究開発が行われているが実用化には時間が掛る）、再稼働が遅れている理由？（活断層の審査に時間が掛っている、認可後も地元同意に時間が掛っている）、福Iの事故で新基準が出来たが更に大きな事故が起きるとまた基準が出来るのか？（新基準はテロ対策やシビアアクシデント対策も含め新設強化されており、想定されるすべてを含んでいる）。
- ・ 学生さんたちは、これまでの大学の授業や研修で原子力関係への関心が高く、知識欲も高いと思われた。今後原子力関係企業や青森県内企業へ就職を希望して行くと思われるが、今回の対話会がその意識を高める良いチャンスになればと思う。また、質疑応答に加えディスカッションの時間が取れるとより効果が増すと思えた。

(本田一明)

- ・第4グループの対話テーマは「地域振興（電源三法制度、立地地域への支援制度）」であった。 当地の交付金を活用した地域振興の状況についてはある程度知っており、気楽に構えてはいたものの、このテーマで話が弾むか一抹の不安があった。対話の題材に「地域振興」を取り挙げることは珍しいのではないだろうか。
- ・このため、事前に第3グループの高橋さんが会長時代の東北エネルギー懇談会から出版された小冊子「ひろば」から、末永洋一氏の「原子力との共生を目指す青森県—青森県の開発と発展の歴史を振り返りつつ」を参考にPPT資料を作成し、対話に当たっての話題提供として冒頭に説明した。
- ・簡略に資料内容を説明した積りであったが時間を使ってしまい、三谷さんからの説明・解説、対話の時間に制約を与えてしまったことが悔やまれる。ファシリテータとしては今後気をつけたい。
- ・学生さんの進行役を決め、対話を行った。対話時間が足りない嫌いはあったが、学生さんたちには近世からの青森県の地域振興と原子力産業との関りを理解して頂けたのではないかと思う。また、普段から疑問に思っているという質問も出され、学生さん、シニア双方が満足のゆく対話会ではなかったかと思料する。
- ・加えて、質問の回答として丁度昨年末の風間浦村の原子力施設誘致構想の例を話すことができ、地域振興と原子力との関係を身近に感じてもらったのではないかと思う。

(瀧上 浩幸)

八戸工大生との対話会にオブザーバとして参加させていただき、ありがとうございました。また、対話会のご準備をして頂いた八戸工大の先生方やシニアの方には感謝申し上げます。

今回、八戸工業大学対話会は2019年度に続いて2回目の参加となりました。前回2019年1月の対話会では原子力施設に就職した八工大の先輩を迎えて一緒に対話会を実施、今回は内閣府の實國参事官による「令和2年度原子力白書」に関する基調講演を踏まえて、原子力白書を基にテーマを選定してグループ討論を実施となり、対話会の実施方法について工夫をこらしておられることに、感銘を受けました。

今回はグループ1「エネルギー自給率と備蓄、再生可能エネルギーと原子力の特色と役割分担」に同席させて頂き、学生達の知識と意見を聞くことが出来たことは、大変貴重な時間となりました。

グループ1では最初にテーマについてどのような考えをもっているのか全員に話してもらうことから始めました。その中で、何人かの学生から「メディアに左右されないこと」という意見が出たことに感心しました。メディアは世間の感心を集めるためにセンセーショナルな報道になりがちであることを理解していることから、学生達の原子力への感心の高さが伺えました。

今回、原子力に対する学生の知識を把握した上で対話会を進められたことは、学生さん達にとって大いに刺激になり、有意義な時間を過ごせたと思います。日本電機工業会のような業界団体としては、今回のように若い人材に少しでも原子力関連の企業にも興味を持って頂けることを望みます。また、このような有意義な SNW の対話活動に対して、JEMA は今後も継続した支援をしていきたいと考えています。

6. 学生アンケートの集計結果（本田一明）

今回の講演は、内閣府の實國参事官から「令和2年度版原子力白書」について行われた。この講演及びそれに続く4グループでの対話会の満足度は、いずれも参加者21人中「とても満足」17人（81%）、「ある程度満足」4人（19%）であり、充実した内容の対話会との集計結果であった。

（1）参加学生の感想（全体への感想・意見など）

- ・原子力の利用と活用方法についてなど、新たに知ることが多くあった。
- ・原発反対派の人達もたくさんいるが、原発が無くなった後、別な方法は考えているのか気になった。
- ・メディアの情報に囚われずに、自ら情報を取捨選択して自分なりの考えを持つことが大切だと改めて感じた。
- ・改めて原子力エネルギーの必要性を感じた。また、多くの人に与える影響が大きいので安全に行っていることをもっと多くの人達に知ってもらいたい。
- ・時間をもっと取った方が良かったと思った。
- ・新しい知識を得ることができた。
- ・今回の対話会を通して、自分の中にあった知識を他の人に話すという機会があった。誰かの話を聞くということは良くあったのだが、自分が発信するという事は無かったので、とても貴重な機会になった。

- ・原子力を上手く使いことで、安定的な電力供給につながるという大きなメリットがあるということを理解することができた。また、今の基準というものは世界一安全な基準であることが理解できた。
- ・知らないことや間違って覚えていたことを詳しく知ることができた。

(2) アンケート結果詳細

添付アンケート集計結果の通り。

7. 別添資料リスト

- ・アンケート集計結果

以 上